

中華世界秩序論の新段階

茂木敏夫

はじめに——中華世界秩序をめぐる議論の現在

近代以前の東アジアを考察するにあたり、朝貢や冊封によって規定された広域的な秩序の存在を前提にして考えることは、今日では常識に属するといつてよい。しかし、筆者が研究を始めた一九八〇年代半ば頃、日本の学界では前近代東アジアの世界秩序についての共通理解は形成途上で、一九世紀後半の東アジアの国際関係に関する論文を書く際には、その前提として、近代以前の東アジア世界の特徴について、それが一定の合理性を有する秩序であること、あれこれ説明し整理しておく必要があつた。近代世界の論理をスタンダードとする、当時の一般の通念では、前近代の東アジア世界は、たとえそこに一定の秩序を認めたとしても、それは「遅れた」、「封建的」、「畸形」などと否定視されていた。

日本では近年、朝貢や冊封による秩序が、歴史関係の学界のみならず、知識界一般にも広く共有されるようになってきたと実感する機会にしばしば出会うようになった。例えば、今日の中国の論壇に大きな影響力をもつ汪暉の論文を編集して日本語に訳された書が数年前に刊行された際、柄谷行人が『朝日新聞』に寄稿した書評において、こう述べている。「近代西洋に始まる主権国家の観点から見ると、朝貢関係は支配—従属関係でしかない。しかし、朝貢は実際には交易であり、帝国は他国の政治や文化にはまったく干渉しない。朝貢関係は交易や平和を保障する国際的システムなのである」⁽¹⁾、と。

朝貢による秩序の説明が一般紙に、こうした断定調で掲載されたことに、この概念の定着を実感したわけである。これに先んじて歴史学界においては、この秩序は既に議論の前提として自明視されるようになっていた。すると今度は、朝貢関係が、こうして自明の、あたかも安定した、定型の秩序であるかのように論じられるようになったことに、一抹の不安を覚えるようになった。

柄谷が「近代西洋に始まる主権国家」と比較し、その違いとして説明したように、前近代東アジアの秩序は、往々にして近代西洋を鏡にして、そこに映った特徴に基づいて理解されてきたように思われる。対比する西洋自体も実はひとつの理念型だったので、像として映し出された朝貢秩序は二重の意味での理念型だったことになる。この秩序は、同時代の、当事者自身の認識というより、後世の史家によって構築された、東アジアを考えるうえでの、いわば分析概念だといえるだろう。

例えば、戦後日本において、一九五〇—六〇年代につくられた西嶋定生の冊封体制論は、戦前の皇国史観のような、中国の帝政や西洋近代に対抗して構築された日本中心史観の克服や、戦後、アメリカ支配下にあるアジアの連帯のための世界史認識の構築などといった問題意識を投影して、東アジアに有機的な一体性を見出したものである^③。それは、近代の「一体化された世界」が成立する以前に存在していた独自の世界として、「インド世界」、「イスラム世界」、「ヨーロッパ世界」とともに「東アジア世界」を想定した上原専祿の主唱する世界史像にもとづくものだった^④。つまり、あらかじめ「東アジア世界」という枠組が設定され、その一体性を実現する紐帯として冊封体制が「発見」されたわけである。

また、同じ頃につくられたフェアバンクの朝貢体制 tribute system は、近代世界をモデルとして、これを条約体制 treaty system ととらえ、これと対比して一九世紀、西洋の衝撃によって中国が近代世界に包摂される以前の、前近代

の階層的関係を朝貢体制と理解するものだった。^⑤ 東インド会社など、主にイギリス側の史料を用いたアプローチの結果、当時のイギリス側の視角、すなわち西洋近代を標準とする視角から光をあてられることで、その標準とは異質の特徴が浮き彫りにされる結果となったわけである。「衝撃と反応」および「伝統から近代へ」という図式的理解のもとで、近代から光をあてることによって前近代の特徴を見出したものといえる。その後一九八〇年代以来、大きな影響力をもった濱下武志の朝貢システム論^⑥は、香港上海銀行の支店網を通じて近代に機能していた華僑送金網にヒントを得て、そこから前近代の朝貢ネットワークを見出す、すなわち近代を前近代に遡及させることによって、近代と前近代の連続性を構想するものだった。

こうして抽出された東アジアの中華世界秩序論が研究者の間で定着してくるにつれて、歴史研究において、今度、この概念は確固たる「事実」として固定化され、この「事実」を出発点としてさまざまな個別の事象が説明されるという顛倒が生ずることになった。柄谷の書評からは、そうした顛倒がさらに一般化してきたことを感じたわけである。

たしかに一九世紀の東アジア世界の変動が、大筋、近代西洋との対峙なかでの変動だったことを考えれば、こうした理解はそれなりに有効であった。しかし、この間に蓄積されてきた実証研究などからは、この秩序はそれほど固い定型化された秩序ではなかったと批判されるようになっていく。^⑦ 以下に論ずることになるが、中国王朝と周辺との関係はそれほど安定した、静態的なものではなく、双方がせめぎ合う、緊張をはらんだ動態的なものであった。中国を頂点とする整然とした秩序というイメージは、こうした動態的な関係を静態的な秩序として語っているに過ぎない。考えてみれば、周辺側の史料はほとんどが中国王朝との一対一の関係を記すに過ぎず、全体として、秩序として語る史料の多くは中国王朝側の、漢語文書である。中国王朝の公文書の場合、臣下たる官僚がこれを記すことは中国皇帝

の顕彰にも通ずることになる。結果として、史料の語りが中国中心になることは当然であろう。すると、このような実態と語りとの間のズレや相互関係を自覚的に理解する必要があるだろう。

こうした状況を考えると、朝貢や冊封による東アジア世界の秩序をめぐる議論は、今や新たな局面に入ったといふべきであろう。そこで以下、新たな局面において留意すべきと思われるいくつかの点について指摘することで、問題提起としたい。

一 伝統的秩序の再解釈

(1) 境界維持装置としての礼

東アジアに成立していた「国際秩序」は、中国とその周辺諸国・諸社会との関係を、基本的には、華夷觀念や儒教の礼治、徳治の理念などによって、朝貢と冊封の礼の關係として結びつけた秩序であった。この關係は、皇帝より領ち与えられた曆を使用し、定められた時期やルート、使節の編成、貢品の調達、定型の文書や謁見の作法など、儀礼の關係として表現されるものであった。こうした儀礼の形式や表現が満たされれば、皇帝の權威は受容されたとみなされ、それ以上の内政や外交には大きな関心は示されず、結果として実質的な干渉はおこなわれなかった。

儀礼というものは、徳治の理念を象徴し、可視化するものであった。しかし、一度定められてしまえば、あとはカタチである。定型化した手順や所作を正しく履行しさえすればよい。そうすれば徳の内実は備わっているものと解釈され、本来語られるはずの徳の理念についてはいちいち語る必要はない。その儀礼の枠に収まる限り、理念に語られる徳治の内容とかけ離れることはないだろう。もちろん儀礼を通じてその理念が内面化されていく場合もあるだろうが、それは確認しようもない。朝貢に関する儀礼を規定どおりにおこなっていれば、有徳者たる皇帝の徳を慕って臣

従ってきた関係としてのストーリーが成立し、その心のなかまで問われることはない。これによって皇帝の徳による教化が実現している、皇帝の支配が遠方まで及んでいると、中国側から一方的にみなされることとなる。

これに対し周辺の側でも、彼らなりのしたたかな「戦略」によって、儀礼に全く別の意味を付与することも可能であった。たとえば表面的であれ、儀礼として、最小限の中国文化を受け入れさえすれば、中国側からは教化が実現したとみなされ、それ以上の干渉にはさらされない。結果として周辺の側は、圧倒的な大国である中国の直接の影響にさらされることなしに、必要な範囲で中国との交流を確保しながら、自らの習俗・文化を保持することができたわけである。逆にいえば、周辺の側は自らの独自性と自主を守るために朝貢国の列に加わったのである。中国からは教化の拡大、浸透と説明される現象は、周辺の思惑に即していうと、漢字・漢文や儒教、朝貢儀礼など、中国文化圏の公共財を受容して利用すること、つまり中国化によって中国に入り、これを利用して自己の利益を拡大する戦略でもあった。

たしかに、この秩序は中国皇帝を頂点とする君主と臣下の、上下の階層的関係であったため、君主たる皇帝の側の恣意によって容易に抑圧へと転化しかねない可能性を有していた。ただし、徳治の作用する政治空間において、「事大（大につかえる）」や「字小（小をおもいやる）」という言葉が語られると、小国が「大につかえ」れば、大国はこれを保護、優待することが期待されることになる。それを無視すれば、大国は自らの徳に傷がつく。そこに、大国の行動を規制しながら自らの利益を追求する、したたかな外交戦略が小国の側に開けてくる。一方、大国たる中国の側でも、小国を優待すれば、他の小国の自発的な服従を促すことにもなり、かえって低いコストで大国としての存在を誇示することができるだろうし、それによって国内においても皇帝の権威が高まるであろう。

このように、中国と周辺とが、朝貢と冊封に関わる儀礼にそれぞれの思惑（あるいは解釈）を込めて、これを履行

していた。儀礼によって中国と周辺との間は大国と小国、君主と臣下とに分けられたことにより、それぞれは質的に異なるものとされて立脚する場が隔てられ、それによってかえって共通の場で双方が利害を衝突させることが回避される結果となった。そのようにして双方が、それぞれの思惑を朝貢・冊封に関する儀礼に投影し、自らの利益を追求したのである。そのような意味で、朝貢・冊封に関する儀礼は、中国王朝と周辺諸国・諸社会との関係を円滑に維持していくための境界維持装置だったといえるだろう。この境界維持装置によって双方の思惑の違いは隠蔽されてしまい、結果として、違いを残したまま橋渡しが可能になる。朝貢と回賜の関係は、いわゆる朝貢貿易として結び付けられる一方で、儀礼の形式さえ満たされていればそれ以上は問わないことによって、緊張が必要以上に高まることが未然に防止される。すなわち問題が生じても上下の関係である以上、譲歩の説明が容易であることによって（上位が恩恵として譲る場合も、下位がへりくだって譲る場合も想定できる）、摩擦の冷却装置としても機能し、それによって適度な距離が保たれて共存が実現したのである。

以上のように、徳治をめぐる言説空間において、中国と周辺諸国とが儒教の概念を用いてやりとりし、それぞれが自らの利益を追求する、せめぎあいの場として、東アジアの伝統的な国際秩序は理解できるだろう。したがって、ここに実現した共存や安定は、けっして静態的なものではない。中国と周辺諸国とのせめぎあいの結果としての均衡状態であった。異質性や多様性のせめぎあう均衡状態という、きわめて動態的な実態が、儒教的概念によって、あたかも静態的な安定であるかのように語られているに過ぎない。

ところで、この均衡状態としての秩序は、全体としては漢語の、儒教的概念によって語られる。非漢字圏の成員の場合、国内的には自らの言語で語るであろうが、それは中国王朝との個別の関係を語れば十分で、秩序全体としての語りまでには必要とされない。全体としての語りが必要とされるのは、中国の側のみである。それも会典や史書など、

中華の制度やイデオロギーを語る場において、天下を主宰する立場から語られる。これを漢字圏・儒教圏の知識人が共有して復唱し、内面化していく。漢字圏の知的エリートにとって、彼らがエリートである根拠は、まさに中華の文化に通じていることに他ならなかったからである。さらに、漢文史料をあつかう後世の歴史家が文献実証主義に立脚して「誠実に」解説し、時代を越えて過去の「事実」として再構築していく。それによって伝統的秩序は中国中心の整然とした秩序だったというイメージが過去の実像として確認され、それどころかますます強固にされていくわけである。これこそが中国を中心として成立していたとされる秩序にほかならない。

(2) 結果としての対等、自主、多様性

朝貢と冊封の儀礼の関係によってつくられる、この秩序の考え方は、本来、普遍的なもので、広く天下に及ぶはずであったが、現実にはその関係が及ばない外縁も存在したことはいうまでもない。そのようなところは、華夷の弁別によって夷狄としたり、中華による教化を受け入れない「化外」（教化の外）とみなしたりする便法によって、柔軟な処理がなされていた。それによって、境界維持装置としての礼を介さない関係さえ可能になっていた。中国王朝は、化外において放任してしまう場合もあるが、必要とみなせば、礼秩序の枠外で通商関係を結ぶこともあり、これは互市という枠組みで処理した。⁽⁸⁾ その場合、中国王朝との関係は結果的にはより「対等」な関係になる。

ただし、この「対等」には注意が必要である。中華の礼が通用する範囲内、すなわち教化の範囲内であれば、礼をもって待遇するだろう。すると上下の関係において、分相応の位どりがなされ、それが礼によって結ばれる。すなわち上下の不平等な関係になる。これが文明の関係である。しかし、礼の通じない、価値の埒外にあるものとは、礼を以てつき合うことができない。文明の埒外は「化外」に置かれて皇帝の徳治の恩恵にあずかれないことになるが、し

かし現実には一定の関係をもたざるを得ない場合もある。その場合、礼による洗練された関係が結べない以上、個と個とのむき出しの関係にならざるを得ない。結果として「対等」な関係となるわけである。この関係は、あるべき秩序からいえば、必ずしも望ましい関係ではないので、できるかぎり周縁化、不可視化しようとするはずである。こうして結ばれた通商関係が互市ということになる。

近代の関係においてはプラス価値である「対等」は、実は中国王朝の秩序からみれば、むしろマイナス価値であったわけであるが、こうした価値の顛倒是、「帝国は他国の政治や文化にはまったく干渉しない」（柄谷）という「干渉」あるいは「自主」についてもいえるだろう。皇帝の直接の教化が及ぶ中華の民には中華の礼や法が適用されるが、朝貢国や土司の支配する社会において、皇帝による文明としての礼や法の恩恵に浴するのは、その首長である王や土司のみであって、民まではその恩恵は及ばない。その結果、干渉されることはなく、結果として自主が容認されることになり、多様性の共存が現出することになった。今日の価値観ではプラスに評価される「干渉しない」やり方は、中国王朝からみれば決して積極的な措置ではなかった。つまり、本来なら普遍的に適用されるべき中華の文化であるが、実際にはそれは困難であるので、そうした現実との矛盾を処理するための便法であった。周辺の側では、既に述べたように、逆にこの「干渉しない」やり方を積極的に利用して、对中国戦略をたてていたわけである。

また、こうして結果として実現した「多様性の共存」についても再考の余地があるだろう。これは、異なる文化として認知されたものどうしの対等な関係における多様性の共存ではない。あくまでも価値の基準は中華（現実には中国）に独占されているわけであり、その単一の基準によって華と夷が弁別され、序列化される。中国の礼によって具現される文化は唯一の、いわば大文字の「文化」であった。化外におかれて放任されるというのは、この唯一の文化を受け入れない、対話可能な他者として遇されないことの裏返しでもあった。

そして、修養してこの大文字の「文化」を身につけた君子の内面は、「格物、致知、誠意、正心、修身、齐家、治国、平天下」（『大学』）といわれるように、地域、さらには国家へと際限なく遍く拡張していく。教化が完成すれば、君子の内面は他者の内面と連続し（君子ならば、誰もが同じに考え、同じに感ずるはずだ！）、^{（9）}「爾も我もない」^{（なんじ）}一体化された「万物一体」として、均質な全体が形成されるという論理である。中国では社会を、同質性、均質性の、一色に覆われた平板な全体として考える傾向があり、異なる他者や多様な個の存在という発想は希薄であることが、日本の中国思想史研究においてしばしば指摘されている。^{（9）}中国の秩序観が内包する、単一の基準による均質な社会を志向する欲望は、朝貢秩序の論理を考える上でも無視できないだろう。

（3）清朝の多民族統合

異民族王朝である清朝は、内陸の非中国文化圏を藩部として版図に収めた結果、中国の論理とは異なる別の語りの可能性を留保することになった。

明朝の版図や制度を引き継ぎながら中国の正統王朝として君臨して、周辺との朝貢・冊封関係を維持しながら、非中国文化圏においてはチベット仏教世界のモンゴルやチベット、およびトルコ系ムスリムの世界である新疆を藩部として版図に収めた清朝をどう理解すべきかについては、近年活発な議論がなされている。^{（10）}モンゴルとの関係としてはチングス・ハーン以来の内陸アジアの大ハーンとしての王権の正統を継承する内陸帝国として、あるいはチベットとの関係としては仏教共同体として語ろうとするなど、非中国世界に関しては、漢語や儒教などといった中国的な語り方ではない、他の語り方をいくつか併せもっていた。内陸との関係にはあえて漢語や儒教の論理は介在させず、満文や蒙文でやりとりする姿勢もとられた。

もちろんこのような内陸におけるやりとりも、中国的論理を貫徹させて、土司のような、中国化を求めないで放任し自治に任せる措置の変種として理解することも可能である。藩部におけるこのような非中国的側面を含めた清朝の全体を、漢語で中国文化世界に向けていうときには、「中外一家」などの表現が用いられた。しかし、清朝は内陸アジアやチベット仏教の論理など、他の論理を放棄しようとはしなかった。複数の論理を衝突しないようにすれ違わせて適宜使い分けていたのである。漢語や儒教による語りは清朝の統合を支える複数の語りのひとつでしかなかった。それぞれの視点から語られる複数の全体としての語りは、結局、皇帝という個人の身体とその人格において統合されていたといえる。皇帝が誰（満洲、モンゴル、漢、チベット、東トルキスタンのムスリム、あるいはそのいくつか）を向いて語るかによって、どの言語文の、どの語りが適切か、がその都度選択されていた。均質性を志向する中国的秩序には一元化せず、それどころかいかなる秩序にも一元化しないことにより、清朝の多民族、多文化の統合は実現していたのである。

二 近代と対峙する伝統的秩序

(1) 再定義される伝統

伝統的秩序は、一九世紀に西洋近代の秩序と対峙するなかで変容を迫られることになった。その変容の特徴について、いくつか指摘したい。

まず、一九世紀後半の朝鮮との関係についていわれる「属国自主」という概念についてである。⁽¹⁾この概念は、一八六〇年代、アメリカが朝鮮と紛義を引き起こした際に、英米両国公使が清朝の総理衙門に朝鮮との関係について問いただしたとき、総理衙門が米国に「朝鮮は中国に臣服しているが、もとより一切の政教禁令は、該国自身が主体

的に行なっているので、中国はこれまで関与してこなかった（朝鮮雖系臣服中国、其本処一切政教禁令、概因該国自行専主、中国向不與聞）と答えたことによる（英国への照会には「朝鮮雖系中国属国」とある⁽¹⁾）。以後、日本との交渉のなかでも、この概念が問題になった。

華夷の尺度によって劣位に位置づけられたところとの関係は、皇帝と王との間の君臣関係が結ばれるのみで、民には直接皇帝の礼や法は及ばさない、だから干渉せず自主だという論理は、ここでは朝鮮の抱え込んだ紛争に巻き込まれないための方便として持ち出されている。つまり、西洋諸国の近代のまなざしに応えていくなかで、従来の関係を振り返り、その実際に即しつつ、なおかつその時点での中国の立場を損なわないような説明を選びとっていった結果が、この「属国自主」だった。

この枠組は、一八七〇—八〇年代、朝鮮のみならず、日本やイギリス、ロシアなど、朝鮮半島をめぐる主要な勢力の政策とも大きな齟齬を生ずることなく機能した。中国の標榜した「属国自主」の枠組に、朝鮮と列強とがそれぞれの立場と思考でアプローチして、この枠組を利用することにより、この枠組によって一定の均衡状態が実現していたからだった。つまり、「属国自主」は、一九世紀後半の東アジアにおいて新たに構築された境界維持装置であった。

しかし、朝鮮半島をめぐる利害の対立が先鋭化することで、それぞれの思考を吸収して対立を隠蔽していた境界維持装置も機能しなくなっていた。清朝も朝鮮への実質的な支配を強化せざるを得なくなり、ついに日清戦争が勃発し、朝貢秩序は崩壊してしまった。現実としての朝貢関係が消滅したことで、その後、伝統的秩序は過去の記憶として語られるようになった。近代のレンズを通じて伝統的秩序を理解する営みは、近代世界との対峙とその結果としての朝貢関係の不本意な喪失という現実によって、今度は理念のなかで営まれるようになった。こうして再編、再定義された過去についての語りが、伝統的秩序や一九世紀についての、我々のイメージを形成し、定着していくことと

なった。

清朝滅亡後、民国期に編纂された『清史稿』では、外国についての記載は『明史』とは異なる。『明史』では一括されていた「外国伝」が新たに「邦交志」と「属国伝」とに分けられ、邦交志は近代の条約国を、属国伝は朝貢国を叙述している。条約国については「志」の部に移され、朝貢国は属国として列伝のなかでその最後に、土司、藩部の後に記載されている。属国は省と藩部に続く、清朝の内部の、こちら側の存在として位置づけられ、外部の、結果として対等な関係（「邦交」）となる外国と区別して記載されたわけである。

属国伝は朝鮮から始まり、以下、琉球、越南、緬甸、暹羅と続く。それぞれについて、清朝へ朝貢して属国になった端緒から始まり、属国から離脱した経緯をもって叙述は終わっている。例えば、朝鮮は日清戦争の結果、馬関条約で朝貢関係が否定されて独立自主の国となった、と結ばれている。琉球は、一八八〇年の日清間での交渉が決裂した経緯を説明したあとで、琉球の滅亡をいって完結しており、越南は清仏戦争について述べた末尾に天津条約締結により、フランスの保護に入ったことで叙述は終わっている。「近き者説び、遠き者来たる」（『論語』子路）といわれるように、皇帝の徳を慕い寄ってくる自発的臣従として語られる伝統的な統治においては、朝貢に来るか否かは朝貢する側の問題であるので、中国王朝の歴史叙述においてはことさらに離脱についてふれる必要はなかったであろうから、属国との関係に関しては、これまでになく強い関係で結ばれた「われわれの側」という記述になっているといえる。つまり、本来は清朝の内部に属する属国が列強の侵略によって離脱していく、いわば属国喪失のストーリーとして描かれているわけである。今は独立した朝鮮、滅亡した琉球、フランスの保護国となった越南は、外国（「邦交」）とは違い、本来は清朝の内部に属する国であった、とでもいうかのように。そこには、一八八〇年代以来の清朝による辺境への実質的な支配の強化の結果を既定とし、そのように近代に再編された関係を標準として過去を見る

姿勢がうかがえる。⁽¹³⁾

(2) 近代を受容する伝統

単一の、大文字の「文化」によって華と夷とが弁別され序列化される華夷主義の秩序は、近代西洋の〈文明―未開〉や〈先進―後進〉の構図による文明主義と親和性が高かったといえるかもしれない。⁽¹⁴⁾ 華夷主義は東アジアにおいて共有されていたため、この問題は東アジアに共通する問題であった。

日本の文明開化は、学すべき文明（＝中華）を中国から西洋に変えただけという解釈も可能であるし、近代日本の沖縄やアイヌに対する同化・文明化による近代的支配の確立は、近世以来の華夷主義の延長として理解することも可能であろう。かつては放任するしかなかった辺境が、文明化による技術の進化の結果、統治に組み込むことが可能になったわけである。植民地台湾の原住民におこなった「理蕃政策」は文字通り華夷主義の延長である。

近代の文明主義やその変種の人種主義が伝統的な華夷主義と融合した顕著な例としては、一九〇三年の大阪博覧会人類館事件が有名である。これは、大阪で開催された第五回内国勸業博覧会において日本に近接する地域の諸民族について、それぞれの日常生活の様子を紹介するという、民間主催の学術人類館による展示企画があり、そこで中国人が「展示」されるといふ報に接した中国人留学生が強く反発して抗議し、清国公使からも申入れが行なわれた結果、開館前に中国人の「展示」が中止されたという一件である。反発した留学生による一節「印度や琉球はすでにほろんだ国で、英・日の奴隷であり、朝鮮は露・日の保護国でかつてわが国の藩属国であった。ジャワや蝦夷、台湾の生番は世界最低の人種で、鹿や豕とさして違わない。われわれ中国人が劣っているからといって、どうしてこれら六種と同じにされなくてはならないのか」⁽¹⁵⁾ について、坂元ひろ子は「鹿や豕」並みという「古典的表現」にも注目している

が、そこに華夷主義の亡霊をみているからであろう。彼らは近代の人種主義による〈優—劣〉の尺度を受け入れたうえで、その尺度に照らして、中国人が劣等だとされた評価を拒絶しているのである。

むすび

本稿では、東アジアの伝統的世界秩序を自明の、既に定型化した秩序だと考える傾向に注意を促すための問題提起を行なったうえで、その秩序とそれを支えている思考様式が一九世紀、近代西洋に対応するなかで再編されたことについて、若干の論点を提起した。前近代の史料から歴史像を構築する際に気をつけねばならない陥穽や、近代における過去の再定義や再編成には丁寧なアプローチが必要であろう。

二〇世紀末、さらには二一世紀に入って以降の世界を考えると、朝貢や冊封に注目して近代世界を相対化するという、西洋モデル相対化の試みはその有効性を失いつつあるといえるだろう。西洋モデルを相対化するためにモデル化した東アジアの「伝統」は、そろそろその本来の場に回帰させてやるべきではないだろうか。史料にあらわれた説明がどのような実態であり、その実態が誰によって、どのような利害関係や思惑にもとづいて語られたのか、を解説すべきであろう。そのような試みは、西洋近代モデルを向こうにまわして、それとは異なる「われわれ」のモデルを立ち上げようとするよりは、よほど有意義であろう。それによって、ほころびをみせている近代を、西洋の経験のみから導き出された擬似普遍から、東アジアの伝統やその経験によって、さらなる普遍に鍛え直していく可能性も開けてくるのではないだろうか。

※

本稿は上海の華東師範大学 ECNU-UBC 中国与世界聯合研究中心が主催したシンポジウム「中華民族的形成与認同學術研討会」(二〇一三年三月九—一〇日、於華東師範大学閔行校区)に提出した論文「中華世界秩序論与其新階段」(會議の論文集『中華民族的形成与認同』に収録)の日本語原稿に加筆したものである。また、この報告は、その四カ月前、二〇一二年一月二—三日、ソウルの延世大学で開催された東北亜歴史財団・東アジア研究フォーラム国際學術會議「東アジア文化のなかの中国」における「東アジアで中国の思想状況がどう改訂されたものである。ふたつの會議における韓国や中国等の研究者の反応やそこで交わされた議論からは、この地域の思想状況がうかがわれ、興味深い。本来ならば、會議の議論を加えた改訂稿を発表すべきであるが、その興味深い議論を加えると、大幅かつ全面的な改稿が必要になってしまうので、それは別の機会に譲ることとした。彼らが何を、どう読み、そしてどう反応したのかを考えるためにも、ひとまずは、彼らが読んだ原稿を、なるべくそのままのかたちで提示しておくことは意味があると考えたためである。とはいえ、本稿は日本において、日本語で読まれる以上、それにふさわしいものにする必要もあるだろう。そこで、「はじめに」に若干加筆して問題の所在を明確にした。一方で、本論第一二節については、注を拡充した以外、本文への加筆は必要最小限にとどめた。ソウルと上海とで報告の機会をいただき、議論の場でも配慮していただいた白永瑞(延世大)、許紀霖(華東師範大学)、村田雄二郎(東京大)三氏ほか、會議に関係した方々に感謝申し上げます。

- (1) 汪暉(石井剛・羽根次郎訳)『世界史のなかの中国——文革・琉球・チベット』青土社、二〇一一年。
- (2) 『朝日新聞』二〇一一年三月六日、書評欄。
- (3) 李成市「古代東アジア世界論再考」『歴史評論』第六九七号、二〇〇八年。それ故、日本中心史観に替えて中国皇帝による冊封が唱えられたり、アメリカに対抗するという点から、ベトナムを東アジアに組み込んだりする必要があったことになる。
- (4) 上原専祿『世界史像の新形成』創文社、一九五五年。また、成瀬治『世界史の意識と理論』岩波書店、一九七七年、第三章の整理を参考にした。
- (5) J. K. Fairbank, *Trade and Diplomacy on the China Coast: the Opening of the Treaty Ports 1842-1854*, Harvard University Press, 1953. 44-45. "The early treaty system in the Chinese world order", in J. K. Fairbank, ed., *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign Relations*, Harvard University Press, 1968. など。
- (6) 濱下武志『近代中国の國際的契機——朝貢貿易システムと近代アジア』東京大学出版会、一九九〇年、『朝貢システムと近代アジア』岩波書店、一九九七年、および『華僑・華人と中華網——移民・交易・送金ネットワークの構造と展開』岩波書店、

二〇一三年など。

(7) そのような批判的視点をふまえて、筆者が前近代東アジアの世界秩序について整理したものとして、茂木「東アジアにおける地域秩序形成の論理」(辛島昇・高山博編『地域の世界史』第三巻「地域の成り立ち」山川出版社、二〇〇〇年)、「近代中国における伝統的秩序の語り方」(吉田忠編『一九世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究』国際高等研究所・京都、二〇一〇年)。ここでは、それらを行論の必要に応じて要点をまとめることに、新たな考察を加えた。

(8) 互市については、上田信『中国の歴史』9「海と帝国 明清時代」講談社、二〇〇五年、岩井茂樹「清代の互市と」沈黙外交」(夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学学術出版会、二〇〇七年)、岡本隆司「朝貢」と「互市」と海関」『史料』九〇巻五号、二〇〇七年、などがある。

(9) 近世思想史研究者の伊東貴之は「中国思想自体が、概ね「価値」の同質性、「人間」の等質性・均質性に対する高い要求を本来、有しており、「他者」の異質性、複数性、無数多様性などについての議論が、欠如している嫌いがある」と述べている(伊東「中国近世思想史における個と共同性・公共性」東京大学中国哲学研究会『中国哲学研究』二四号、二〇〇九年、六〇頁)。また、中島隆博は、朱子の構想する「新民」すなわち民を新たにすることによる、自己から他人への連続的な啓蒙の拡大には、人間どうしを本来的な同一性として考える特徴があることを指摘し、「結局は一に回収されてしまったために、同一なものに還元できない複数の「わたし」たちの間で支えられるような「公共性」を最初から無視しているのではないだろうか」と指摘する(中島『残響の中国哲学』東京大学出版会、二〇〇七年、一三八―一三九頁)。法制史研究者の寺田浩明は中国社会の分化を「個の分化を想定しない一体性」という(寺田「合意と斉心の間」森正夫ほか編『明清時代史の基本問題』汲古書院、一九九七年、四三六頁)。筆者も中国の国家の特徴に即して考察した(茂木「中国王朝国家の秩序とその近代」『理想』六八二号、二〇〇九年)。

(10) 岡洋樹「東北アジア地域史と清朝の帝国統治」『歴史評論』六四二号、二〇〇三年、平野聡「清帝国とチベット問題——多民族統合の成立と瓦解」名古屋大学出版会、二〇〇四年、杉山清彦「大清帝国支配構造試論——八旗制からみた」(桃木至朗編『近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク』平成一六―一八年度科学研究費基盤研究(B) 成果報告書、二〇〇七年)、岡田英弘編『清朝とはなにか』藤原書店、二〇〇九年、など。

(11) 「属国自主」についての詳細な研究は、岡本隆司「属国と自主のあいだ——近代清韓関係と東アジアの命運」名古屋大学出版会、二〇〇四年がある。この概念についての茂木の理解は本稿では略述するにとどめたが、茂木前掲「近代中国における伝統的秩序の語り方」を参照された。

(12) 『籌辦夷務始末(同治朝)』(中華所局、二〇〇八年)巻五十七(一八九四)「給美使衛廉士照会」、(一八九五)「給英使阿礼国照会」。

(13) 川島真は「清末の冊封・朝貢の調整の結果が残像として明文化された」という(川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』

名古屋大学出版会、二〇〇七年、二四頁。

(14) 華夷主義と近代の文明主義との親和性とその近代中国における様相については、茂木「中華世界の再編と二〇世紀ナショナリズム」『現代中国研究』第二二号、中国現代史研究会、二〇〇七年、を参照されたい。

(15) 渡辺浩『日本政治思想史 一七—一九世紀』東京大学出版会、二〇一〇年、四一三—四二四頁。

(16) 「留学界記事」『浙江潮』第二期、一九〇三年、一三四頁。

(17) 坂元ひろ子『中国民族主義の神話——人種・身体・ジェンダー』岩波書店、二〇〇四年、七三頁

キーワード

中華世界、冊封、朝貢、徳治、礼治、文化、文明、伝統、近代